

PB-27.**当院外来における塩酸チクロピジンの定期的な血液検査実施状況**

(薬剤部)

○前 彰、宮澤 祐輝、鈴木 篤
松村 正史、畝崎 栄、明石 貴雄
(城西大学大学院)
吉澤 直樹

【目的】平成14年4月の投薬期間制限廃止に伴い、外来処方せんの投与日数は、医師が「予見することができる必要期間」となった。この結果、患者の利便性は明らかに向上したが、患者の状態を長期間チェックできないことから、副作用の発現など病状の変化に気づかないまま、薬を飲み続けるという弊害も考えられる。そこで今回、緊急安全性情報も発行され、警告欄に投与開始2ヶ月間は、2週に1度の来院と血球算定・肝機能検査の実施、投与継続中は定期的血液検査を行うことと記載されている塩酸チクロピジンについて血液検査の実施状況を調査したので報告する。

【方法】調査期間は2004年5月から2004年10月までの6ヶ月間とした。2004年5月の時点で服用開始から2ヶ月以上経過した患者と初回服用開始の患者について調査した。

【結果と考察】調査期間6ヶ月内に血液検査を受けた患者は62.3%であり、残りの患者は6ヶ月間一度も血液検査を受けていなかった。血液検査を受けた患者の検査回数分布は、1回66%、2回19%、3回9%、4回以上6%であった。また、6ヶ月間の平均検査回数は全体で、約1.0回であった。患者の来院間隔調査のために、患者の調査期間内における処方日数を調べた結果では、約8割の患者が2ヶ月に一度は来院していた。また、初回服用開始患者7名のうち2週間以内の処方であった患者が4名、残り3名は30日分の処方であり、2ヶ月間の血液検査実施状況は、0回2名、1回4名、4回1名であった。添付文書どおり検査が行われていれば、3回以上の血液検査を実施しているはずであるが、それを満たした患者はわずかに1人であった。添付文書に「定期的に検査を行うこと」と記されている薬剤は少なくないが、このような医薬品は、漫然とした長期投与を避けるとともに、2ヶ月に1回程度の定期的検査を実施すべきと考える。

PB-28.**Chemokine (RANTES) による肺虚血再灌流障害の抑制に関する検討**

(外科学第一)

○鈴木 明彦、河野 貴文、林 博樹
木村 雅一、高橋 充、中嶋 隆
長束 美貴、緒方 潔、永田 真一
宮島 邦治、林 和、梶原 直央
内田 修、坪井 正博、池田 徳彦
平野 隆、加藤 治文

【背景】肺移植における拒絶反応の抑制の第一歩として移植直後のグラフト肺に発生する虚血再灌流障害の抑制は克服すべき重要な課題の一つである。虚血再灌流障害は摘出臓器の保存状態と関係が深く、臓器移植後急性期障害の一因と考えられており、臓器移植成績を左右する因子の一つである。これを抑制することにより、移植後グラフト肺の機能向上が可能と考えられる。また急性期肺障害は病理学的には炎症性細胞の肺浸潤、肺胞性浮腫、血管内皮と肺胞上皮損傷といった瀰漫性肺障害を呈するが、炎症性細胞の遊走に関わるサイトカインの放出には肺胞内マクロファージが重要な関わりを持つ事が示されている。

【目的】免疫細胞に対して強い遊走活性を有する一連のサイトカイン、さらには同レセプターの活動を制御することで免疫細胞循環を抑制し、肺移植後拒絶反応(虚血再灌流障害)に対する新しい治療のアプローチを試みる。

【方法】ラット左肺の虚血再灌流モデルを作成。温阻血前に抗RANTES抗体を投与し、病理組織学、免疫組織化学、気管支肺胞洗浄液内サイトカイン分析、湿乾重量比、経皮的動脈内酸素分圧測定などに関して肺虚血再灌流障害抑制効果を検討した。

【結果と考察】全てのconditionにおいて抗RANTES抗体投与群は良好な傾向が認められ、免疫細胞(マクロファージ、T-cellなど)の遊走を抑制することにより虚血再灌流障害が抑制される事が示唆された。